

広島県立文書館

平成 27 年度第 1 回 収蔵文書の紹介展

ひろしまとうしょうぐう

広島東照宮

「通り御祭礼」展

「とおりがさいれい」てん

～二百年振りに復活する

城下町の祭り～

平成 27 年 6 月 27 日 (土) ～ 9 月 5 日 (土)

はじめに

京都の祇園祭、江戸の神田祭、大阪の天神祭など、日本の伝統的な都市祭礼には神輿行列があります。この行列では、市民が中心となり、花や人形などで華やかに飾った山車（地域によっては山鉦、笠鉦、曳山、車楽等とも言う）を曳き、賑やかな笛太鼓の音曲や子供歌舞伎などが町中を練り歩き、祭礼を盛り上げました。

江戸時代の広島にも、広島東照宮から現在の本通りを経て、広瀬神社まで約四キロを歩く神輿行列と、城下町住民が曳く石引台という山車に子供らが乗り、鼓笛などで囃し、芸能を披露しながら練り歩く祭礼がありました。それが広島東照宮の「通り御祭礼」です。この行列を一目見ようと、多くの拝見（見物）人が沿道を埋め尽くし、広島藩主や家老などの広島藩士たちも見物しました。

「通り御祭礼」は、徳川家康（二四三～一六二）の五十回忌ごとに開催された祭礼で、当初は「公儀の祭礼」という性格上、権威の象徴であり、厳肅性が重んじられました。が、次第に町人が積極的に参加して、イベント化も進み、文化十二年（八一五）は城下町が上下一体となり、天下泰平を謳歌する祭礼となりました。

家康四百回忌の二〇二五年、「通り御祭礼」が二百年振りに復活します。この展示では、それに先立ち、当時の図絵や古文書によりこの祭礼を紹介します。

（担当 西村 晃）

一 広島東照宮と「通り御祭礼」

江戸時代に、徳川家康を祭神として、幕府や諸大名などにより造営された東照宮は、全国で約五五〇社に上る。このうち、名古屋・和歌山・水戸・岡山・仙台などの東照宮では、各藩が主催する、神幸行列を伴う大規模で、内容豊富な祭礼が、毎年のように開催され、城下町を代表する祭礼として発展した。

慶安元年（二六四八）に広島藩二代藩主浅野光晟が、幕府への忠誠を示すとともに、領民に対する権威の象徴として造営したのが広島東照宮である。広島東照宮では毎年九月十六・十七日に祭礼があったが、神輿が御旅所の広瀬神社へ渡御するのは、五十年に一度の「通り御祭礼」だけであった。

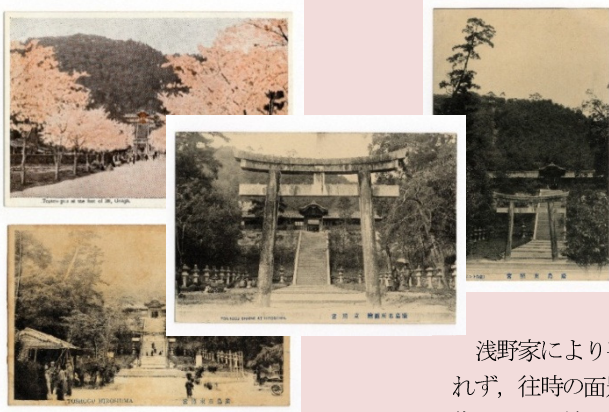
家康五十回忌の寛文六年（二六六六）に初めて開催された「通り御祭礼」（慶安三年説あり）では、「公儀の祭礼」らしく厳かに神事が営まれ、厳粛かつ整然と、神輿が現在の広瀬神社まで渡御した。城下町からも張貫きの人形や、金欄で飾り立てた山鉾が出て、奇麗な声の子供たちの音頭で、四五〇人でそれを曳いたという。行列に加わる土民の服装や、手に持つ道具類は絢爛豪華で、藩主は桜の馬場の棧敷席で、他の藩士も町家などで拝見し、領内外からこれを一目見ようと集まった観客は沿道の両側に満ち、幾十万にも及んだと「知新集」は記している。

広島東照宮の絵葉書

（長船友則氏収集資料 200407-1485～1492）

明治から昭和にかけて発行された絵葉書。広島東照宮は、徳川家康の33回忌に当たる慶安元年（1648）、藩主浅野光晟により、広島城の鬼門（東北）を守護するため、二葉山の山麓から52段の石段の上に壮麗な祀殿が造営された。光晟の母振姫は家康の三女に当たるので、祖父家康を広島の守護神として祀ったことになる。東照宮の参道の両側には見事な桜が植えられ、「桜の馬場」と呼ばれ、広島城下で一番の桜の名所であった。

浅野家により手厚く保護された広島東照宮も、明治になると社殿等の修繕が十分に行われず、往時の面影が失われた。参道の桜も東練兵場の開設に伴い伐採された。大正頃から復活した桜並木は、昭和になると市民の花見の名所となったが、原爆のため焼失した。



「通り御祭礼」行列の道筋（パネル）

神社の御神霊が神輿などで御旅所へ巡幸することを渡御、神社へ戻ることを還御という。渡御行列の道筋を江戸時代の地図に矢印で示した（地図は『新修広島市史』第五巻のうち、「天明年間の広島城下絵図」）。

行列は、東照宮を出発すると、参道の桜馬場を南下し、猿猴橋東詰で西国街道に出た。さらに西国街道を西へ、現在の本通りを進み、猫屋橋（現本川橋）を渡って、堺町から雲石街道を北上、御旅所の広瀬神社へ到着した。道筋の両側には、行列を一目見ようと遠近から集まった人々で埋め尽くされた。



広島東照宮の神輿（写真パネル）

（広島東照宮提供）

東照宮が造営された慶安年間頃の製作と伝わる八角形の大神輿（広島市重要文化財）。

檜材に黒漆及び金梨地塗りの華麗な神輿で、頂上にはほろおろ鳳凰が据えられる。重量は200貫（約800kg）で、50人で担ぐとされている。「通り御祭礼」では、御旅所の広瀬神社まで渡御した。原爆での焼失を免れ、今日まで伝わった。



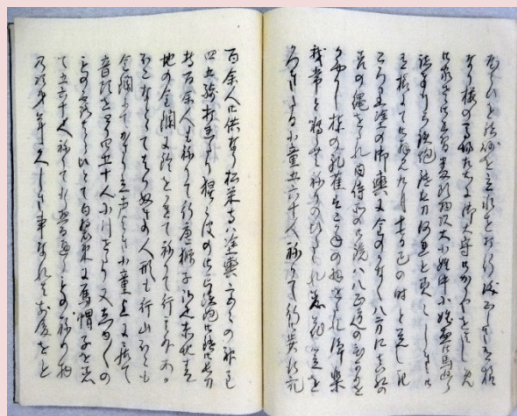
ひろしまひとりあんない
広島 独案内

(長船友則氏収集資料 200407-672)

延享2年(1745)成立と思われる広島城下町の地誌で、第1回の「通り御祭礼」の様子が生き生きと記述される。

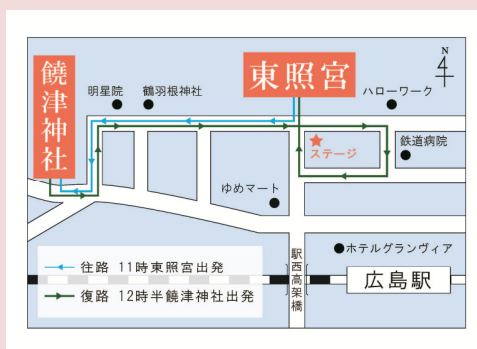
神輿渡御行列の通り筋には、拝見(見物)人から行列を守るため竹矢来(竹を交差させて作った囲い)を設け、清浄な空間とするため、掃き清めて水を打ち、砂を一對円錐状に盛った(立砂)。拝見人は騒がず、行儀よく拝見するよう求められ、秩序が保たれた。これが「公儀の祭礼」の特徴である。きらびやかで神々しい光を放つ神輿の前後を、塗輿の松栄寺(東照宮の別当寺)や馬上の神官が固め、これらを警護するため、弓・鉄砲・槍・長刀を持った武士が従った。

中でも異彩を放ったのが城下町から奉納された張貫きの人形で、子供が乗って、綺麗な声で音頭を取りながら、40~50人でこれを曳いた。藩主一族は桜の馬場に構えられた棧敷で、そして、家老以下の主要な藩士たちも各々道筋の商家を借りてこの行列を見物した。



広島神輿行列「通り御祭礼」(平成27年)の道筋

平成27年10月10日(土)、広島神輿行列「通り御祭礼」が200年振りに復活する。渡御行列は東照宮から「二葉の里歴史の散歩道」を西に饒津神社へ向かう。還御行列は饒津神社から散歩道を東へ、広島鉄道病院前を経て、一部復活した桜馬場を通り東照宮へ帰る。行列は200貫神輿のほか、特別に復元製作した高さ4mを超える石引台(花車)、子供歌舞伎、麒麟獅子舞、長槍・鉄砲・弓隊、町奉行などの広島藩士や町年寄に扮した市民、雅楽を演奏する楽人、神馬など、約500名の予定。

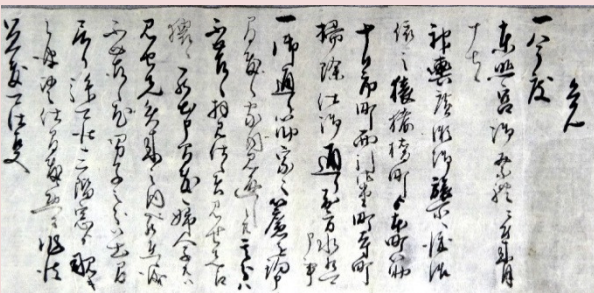


「明和二年の「通り御祭礼」

第三回「通り御祭礼」は、家康百五十回忌の明和二年(一七六五)に行われた。この明和の「通り御祭礼」からは町方の記録も多く残っている。当時の広島藩では儉約令が発せられていたこともあり、藩はつとめて華美を避けて清楚に、「簡易質素」に実施する方針で、第二回で使用した道具類を修理して、数も減らした。神器類の持手が着用する衣装も白衣を使用するようになったが、却って出費が増すことがわかり、第二回で使用した素袍を着した。

「通り御祭礼」の行列は、神社の神輿行列とそれに付き従う藩家臣団の供奉行列、そして城下町衆らによる石引行列で構成されるが、第三回祭礼で特筆すべきことは、神輿行列と供奉行列が「簡易質素」であった一方で、藩から認められた城下町寄附による石引台(一台)の行列が華麗を極めたことである。石引台には子供たちが乗って、鼓笛や乱舞の芸能を披露した。

広島藩が「簡易質素」な祭礼を企図しながらも、このような石引行列を許したのは、祭礼費用や人員を負担する町方の要望を容れざるを得なかったためであろう。「公儀の祭礼」から次第に町人が積極的に参加する「城下町の祭礼」と変わりつつあった「通り御祭礼」は、次の文化十二年の祭礼で大きな花を開く。



東照宮御祭礼二付御触書 明和2年(1765)
(吉井家文書 200612-21-4)

明和2年の「通り御祭礼」開催前に、広島藩から城下町五組(新町組・中通組・白神組・中島組・広瀬組)へ宛てた触書。

9月17日に神輿渡御行列が通行する道筋の清掃と、水打ちを命じたほか、家内での簾使用を禁止している。また、拝見人は店先へは出ず、女性や子供は店先に組まれた竹矢来の内側で、男子は家の土間へ降りて拝見すること、行列を二階から見下ろさないことなどを求めている。これらの禁止事項は、広島藩主の行列が広島城下町を通行する際とはほぼ同様であり、この神輿行列が神聖視されると同時に、権威の象徴であったことが窺える。

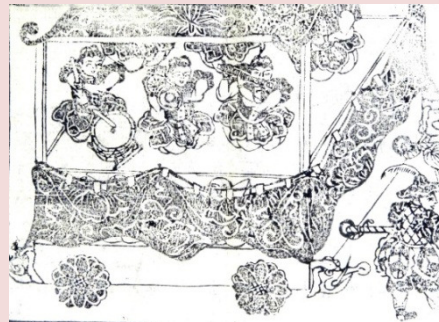
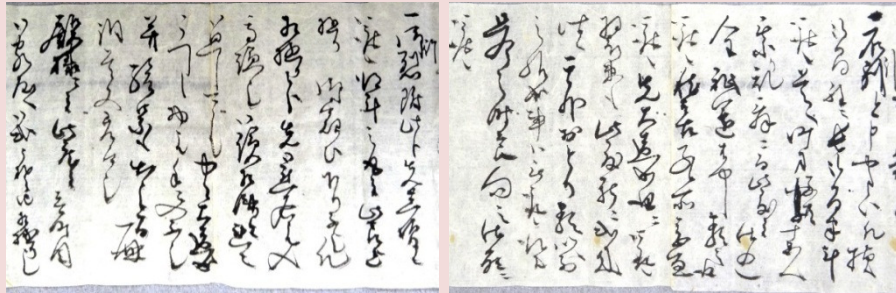
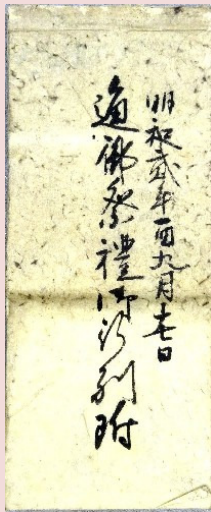
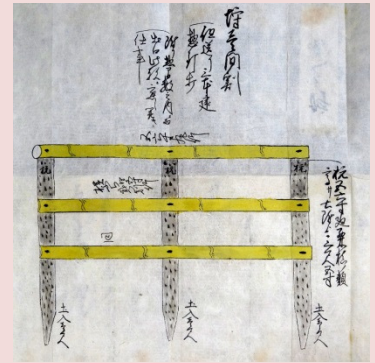
通り御祭礼書類書抜

明和2年(1765)

(岩室家文書 198813-54)

広島城下町五組のうち、新町組大年寄であった室屋(岩室)喜右衛門が、藩から命じられた「通り御祭礼」準備に関する通達や指令類、大年寄の間で取り交わした事務連絡をまとめた書類。

広島藩は、神輿行列を見物人から守るため、右のような柵(柵)の仕様書を図示して、通り筋に廻らすよう城下町に命じた。仕様書によると、3本の杭(栗・榎製)の高さは各約1m、横には太さ15~18cmの竹を3本(下の2本は割竹)使うよう指示している。このほか、湯茶所や雪隠(便所)など、通り筋の諸準備はすべて城下町が負担するとともに、多くの町人が神輿の担ぎ手や諸芸能の演じ手などとして行列に加わった。



「通り御祭礼」見物を勧誘する手紙(上)と、同封された「御祭礼御行烈略絵図」(下)など

明和2年(1765)8月 (吉井家文書 200612-21)

(上)は、広島商家の竹原屋惣左衛門が、竹原商家の米屋(吉井)半三郎へ、「通り御祭礼」前の8月26日に送った手紙。半三郎の妻が「通り御祭礼」を見物するため来広することを知り、祭礼の準備状況を伝えて、半三郎自身も見物に来よう勧めている。

手紙では、今回は石引台という屋台が行列に加わり、城下の子供15人が乗り、祇園囃子で乱舞の稽古を進めていることを伝え、祭礼の準備が着々と進んでいる様子が窺える。見物人に対する規制は相変わらず厳しいが、市民が行列に加わり、祭礼を盛り上げようとしていることが窺える。

この手紙には、行列の構成や、その配置などをまとめた「通御祭礼御行列附」(左)と、「御祭礼御行烈略絵図」(下)が同封されていた。これらの行列の細かな情報は広く頒布され、行列を拝見する際の案内書となった。

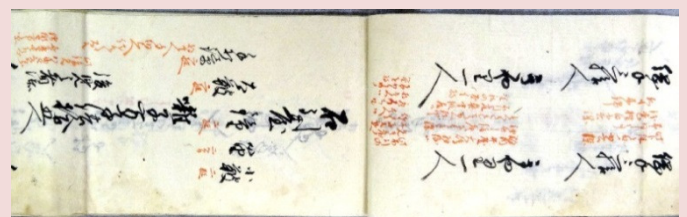
「御祭礼御行烈略絵図」は、「広陵豊寿軒」から拝見客の案内用に刊行された刷り物で、城下町寄附の石引行列も描かれている。序文は、摺れて読みにくいが、行列を絵図で表現するのは困難で、全体の100分の1程度でしかないが、このような時代に神幸行列が出るのはありがたいことだという口上が書かれている。

渡御御行列・還御御行列

明和2年(1765)(岩室家文書 198813-56)

明和2年「通り御祭礼」渡御行列の構成や、その配置などをまとめた、行列書又は行列附と呼ばれた文書である。行列に加わる藩士名も記載されている。これらは祭礼前に予め決められ、情報として流布した。

この行列書には、行列に加わる人々の衣装を朱書で記入している。行列に加わる人数を数えると約560名だが、実際にはもっと多人数であったと思われる。これは、城下町寄附による「石引行列」部分で、石引き台の綱は60人で引いている。台には小鼓・笛・鐘・太鼓・手打鐘を持つ囃子方の子供15名が乗り込み、乱舞を披露したのであろうか。



三 文化十二年の「通り御祭礼」

家康の二百回忌、文化十二年（一八一五）に開催された第四回「通り御祭礼」は、荘重厳肅であった第三回との中間程度とされながら、二つの点でそれまでの慣習を破った。

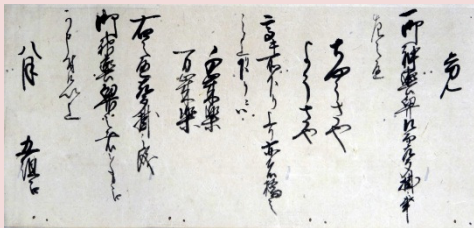
一つは、これまでで城下町全体で一台であった石引台が、五つの町組（新町・中通・白神・中島・広瀬組）ごとになったことである。職人は技術を凝らして、華麗で奇抜な石引台を製作し、その出来栄を五組で競い合った。台の上では囃子のほか様々な芸能が演じられて町人の粋が示され、「通り御祭礼」は大いに盛り上がった。その様子は「東照宮御祭礼図絵」に生き生きと描かれている。

もう一つは神輿還御の伝統的秩序の変化である。第三回までは、市街地を通り、拝見を許されたのは渡御行列だけで、還御行列は日が暮れてから間道を通り、ひっそりと東照宮へ帰った。しかし、第四回では還御行列は翌日となり、渡御行列と同様に市街地を通行し、多くの拝見人を楽しませながら東照宮へ帰っていった。総人数も最大規模の千人を越したことが確実である。

当初は「公儀の御祭礼」の性格が強かった東照宮「通り御祭礼」も、城下町の町衆の声が反映されてイベント化が進み、「城下町の祭礼」へと変貌を遂げた。

東照宮「通り御祭礼」に関する通達類 文化12年（1765）8月 （保田家文書 199603-2「玄徹様分」巻子）

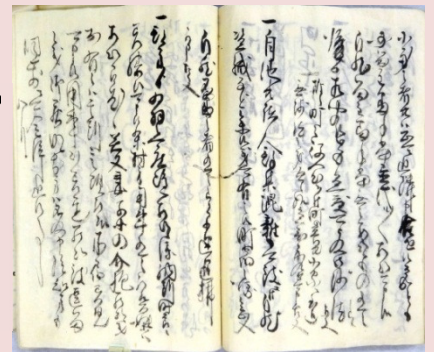
新町組京橋町の縄屋から分家した縄屋七兵衛が受けた辞令や賞状などをまとめた巻子。後半は、稲荷町西組町年寄であった七兵衛が受け取った「通り御祭礼」に関する通達類が貼り継がれる。巻子の末尾部分（写真）では、神輿のかつぎ手に対して、掛け声は「ちょうさや ようさや」、高い所や橋の上り下りには「千歳楽 万歳楽」とするよう、藩が城下町へ指示している。



東照宮「通り御祭礼」の神輿渡御につき心得の書附

文化12年（1815）8月

（竹内家文書「御触順達控」198801-5）



9月16日から18日まで、広島で「通り御祭礼」が開催されることは郡中へも触れられ、この間の普請などは禁止された。稲の取入れや年貢納入で忙しい時期に重なるため、郡中からの見物は原則として禁止されたが、妻子などの介抱など、やむを得ない事情がある場合に限り、庄屋の許しを得れば広島へ出てよいとされた。

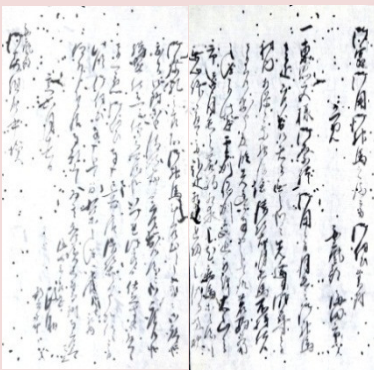
とうしょうぐうさまごさいれいしんめいっけん 東照宮様御祭礼神馬一件

天保4年（1833）

（千葉家文書 198812-244）

安芸郡海田市で天下送り役

（宿駅で幕府の書状や荷物を継ぎ送る任務）を勤めた千葉家が天下送り役のほか、村内難渋者への救済事業などこれまでの千葉家の功績をまとめた書類。文



化12年の「通り御祭礼」で、藩の求めに応じて月毛（栗色）の神馬を提供したことを、功績の一つに挙げている。

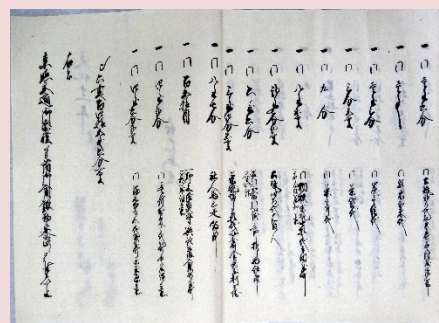
海田市の神保屋清次郎は月毛馬を所持していたが、御祭礼では荒駒（気性が激しい馬）が求められていることを聞き、伯耆国大山の牛馬市まで出張し、病気も考慮して2頭の月毛の荒駒を購入して帰国した。「通り御祭礼」終了後は、藩の内意により藩の牧場であった情島（現呉市阿賀町）へ種馬として放牧した。

新町組「通り御祭礼」につき諸入用銀勘定帳

文化12年（1815）

12月

（岩室家文書 198813-55）

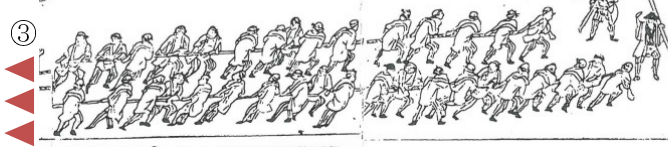
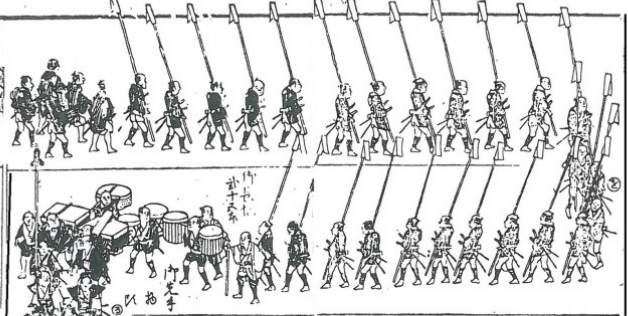
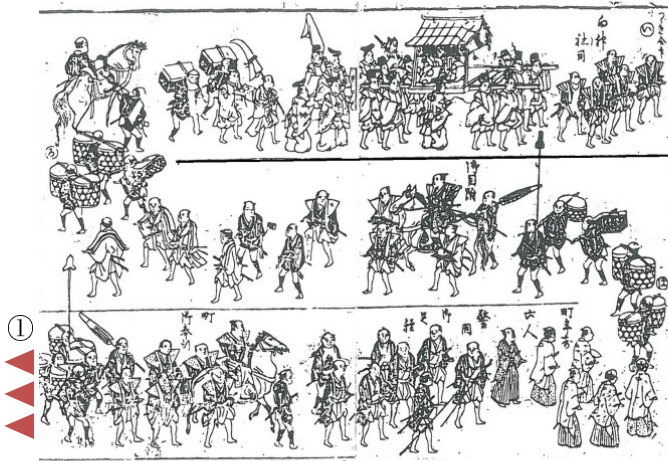


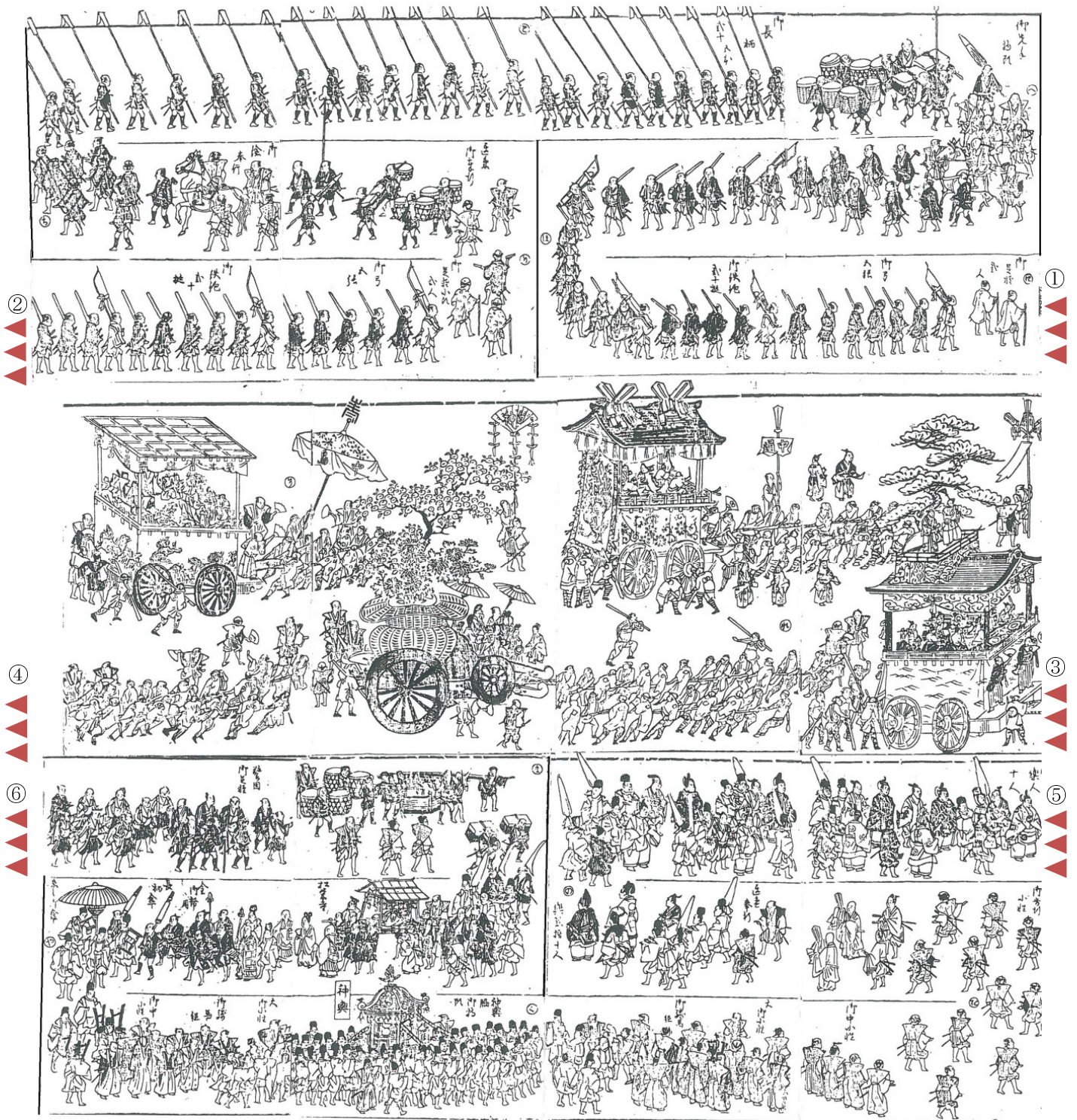
「通り御祭礼」に参加し、人々がそれを安全に拝見する準備のため、城下町が負担する費用は莫大なものであった。これは、城下町の5町組のうち新町組が、文化12年の祭礼で要した金額を項目別にまとめた帳簿で、総額で銀6貫145匁余（約600万円）を支出している。

新町組で負担した「御庭払」の鬼面やその衣装などが722匁、新町組の道の両側に設置する埒（木柵）の製作費用が927匁余などで、石引台の製作費用は含まれていない。

東照宮御祭禮略圖繪
御神白神社司御案内町年寄 齋宮御先手足輕
町御奉行騎馬 遠達奉行 御号五張 御鐵炮下提

廣島書林
文藻堂





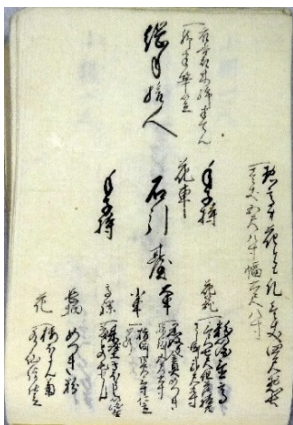
東照宮御祭礼略図繪 文化12年(1815)5月 (千葉家文書 198812-215-2)

9月に予定される「通り御祭礼」の神輿行列の案内書として、同年5月に文藻堂(中島本町世並屋)から発行された行列絵図。

コンパクトに行列の全体像を描き出すため、1頁を3段組みにして、行列を目で追えるように工夫している。なお、ここでは、同じ番号へ続くように読み取っていただきたい。

文化12年「通り御祭礼」御行列書 文化12年(1815)9月 (千葉家文書「御迎神御行列」198812-240)

文化12年「通り御祭礼」渡御行列全体の構成や、その配置などをまとめた「行列書」と呼ばれる文書。これは、5台のうち最も奇抜で、観客の目を引いた、「花車」と呼ばれた白神組の石引台の部分。造花を含めた高さは約4.2mで、黒塗りの前輪だけでも直径が約1.7mあった(後輪の直径は約1.3m)。車の金具は鍍金され、花籠にも金箔の代用箔である粉箔が施されるなど大変豪華で、絹仕立ての造花は、四季折々の桜・牡丹・菊・水仙が選ばれた。



四 明治四十三年の「時代行列」と平成十年の「神輿」行列

家康の二百五十回忌であった慶応元年（一八六五）は、第二次長州征伐で幕府軍が広島に滞陣したため、「通り御祭礼」は開催されなかった。明治以降も社会変化や、相次ぐ戦争で祭礼の復活は見送られた。

しかし、神輿行列が市街地を通り広瀬神社へ向かったことが一度だけあった。それが明治四十三年（一九一〇）五月に、饒津神社を主会場として開催された浅野長政（一五四七～一六二二）三百年祭の「時代行列」である。十二日間にわたって市内各地で繰り広げられたこの祭礼のメインイベントが総勢二百人の、神輿行列と江戸時代の大名列を模した「時代行列」であった。この道中では、奴の槍振り（やぶら）が五分間ずつ一人か所で披露され、約二〇万人の観光客が押し寄せる人気で、記念絵葉書も発行された。

広島東照宮が創建三百五十年を迎えた平成十年（一九九八）、市民による祭り実行委員会が組織され、東照宮周辺で「通り御祭礼」を模した「神輿行列」が一部復活し、当日は予想をはるかに上回る五万人が集まり、行列を見送った。

家康四百回忌の今年、広島市は被爆七十周年を迎え、その記念事業の一つとして、距離は短いですが、本格的に「通り御祭礼」が復活することになった。



饒津神社三百年祭時代行列・波御行列と芸妓行列の絵葉書 明治43年（1910）（原田家文書 199206-12・14～16 など）

明治43年5月15日から26日まで開催された饒津神社300年祭（浅野長政三百年祭）では、広島市内で花火、軽気球、赤穂義士遺物展覧会、宝物展覧会、各町の装飾、神能、献茶式、箏曲演奏、柔道大会など様々な行事があり、人気を集めた。中でも22日の時代行列と神輿渡御には、『中国新聞』によれば、町を通行する行列を一目見ようと、近郡はもちろん、山口県方面から集まった観光客は20万人、「広島未曾有の人出」であったという。

この絵葉書には、見物人たちが繁華街の町屋前に鈴なりになっている様子が描かれている。

《広島県立文書館

平成27年度第1回 収蔵文書の紹介展
ひろしまとうしょうぐう とお ごさいれい
広島東照宮「通り御祭礼」展

～二百年振りに復活する城下町の祭り～

期 間 平成27年6月27日（土）～9月5日（土）

場 所 広島県立文書館展示室

〒730-0052 広島市中区千田町三丁目7-47
広島県情報プラザ2階

平成10年広島東照宮「神輿行列」 （広島東照宮提供）



楽人行列

騎馬の
広島藩士



石島居前の神輿行列
（島居を潜り52段の
石段を上る）